

# 国士舘大学文学部地理・環境専攻における 入試成績と入学後の成績との関連

内 田 順 文

## 1. はじめに

いわゆる少子化に伴う18歳人口の慢性的な減少傾向から、大学といえども基礎学力に劣る高校生や学習意欲に乏しい志願者をも入学させなければならない時代になってきた。とくに本学のように選抜方法の種類が年々増えてくると、入試方式ごとの入学定員が小さい専攻では、定められた入学者数を充足し、なおかつ定員オーバーをも許されない状況の中で、どのような受験生を合格させるべきか、毎年難しい判断を要求される。

こうしたきびしい条件の中で、受験生一人あたりに何十分もかけて面接を行い、あるいは入試合格ラインの1点の上げ下げをめぐる毎年知恵を絞っているのも、少しでも優秀な学生を入学させたいからに他ならない。しかしその一方で現在行っている選抜方法が真に有効な方法であるかの検証については、とりあえず先送りの状態となっている。たとえば「AO入学者は総じて基礎学力が劣っているのではないか?」「事実上の無試験入学であるがゆえに内部推薦等の入学者の学力は保証されないのではないか?」「受験科目に地理がないデリバリー入試や中期・後期入試による入学者は、大学での専門科目についてこられているのか?」「第二志望入学者はいわゆる不本意入学者である可能性が高く、留年や退学の確率が高いのではないか?」などといった、しっかりした根拠があるとは言えない風評のようなものを耳にすることがあるが、その信憑性のほどはわからない。

そこで、本稿では過去のデータを整理・分析することで、大学入試の選抜方法とその後の学業成績との関係について明らかにしてみたい。実際の学生のデータを使って入試制度と入学後の成績との関係を科学的に明らかにしようという研究はこれまでも多くなされており(伊藤・須田ほか2003, 大久保2007)、AO入学者の学業成績の検討(池田2009, 神林2010)、GPAを用いた成績の比較(岡田2003, 永峯・山崎ほか2007, 赤木・日比野ほか2011, 加藤2011)、いわゆる教育の達成度といったFDの観点からの研究(西丸2013)など、その内容も結果も多様である。なお、本稿で行う統計データの集計・分析には、SPSS ver.22を使用した。

## 2. データと方法、分析対象

分析の対象とした入試成績と学業成績のデータとして、2008年度から2015年度にかけて国士舘大学文学部地理・環境専攻に入学した学生567名ぶんを使用する。分析に用いるデータとして、入試成績に関わる変数（入試関連変数）には、学生の属性を示すカテゴリー変数として入学年度、性別、入試区分、志望区分を、数量型の変数として入試得点率、入試順位率、筆記試験における国語・英語・地理の得点、および参考として学籍番号を設定した。

現時点で本学には入学者の選抜方法として、9月に実施されるAOⅠ期入試、11月に実施される内部推薦入試、指定校推薦入試、一般推薦入試、社会人入試、外国人留学生Ⅰ期入試、2月実施の前期入試（A日程・B日程）、デリバリー入試、外国人留学生Ⅱ期入試、C方式入試Ⅰ期、中期入試、3月実施の後期入試、C方式入試Ⅱ期、の14種類の入試方式がある（ほかに海外帰国子女入試Ⅰ期・Ⅱ期があるが、今回の分析対象期間には該当者はいない）。このように現在の本学の入試制度は複雑であり、分析用のカテゴリー区分としては多すぎることに、また入試の方式によっては該当者数が極端に少ないことから本人の特定を行いやすくなることなども考慮して、AO入試（AOⅠ期入試＋AOⅡ期入試）、推薦等入試（内部推薦入試＋指定校推薦入試＋一般推薦入試＋社会人入試）、外国人入試（外国人留学生Ⅰ期入試＋外国人留学生Ⅱ期入試）、前期入試（A日程＋B日程＋デリバリー入試）、中後期入試（中期入試＋後期入試）、C方式入試（C方式入試Ⅰ期＋C方式入試Ⅱ期）の6つの入試カテゴリーに再区分し、これに入試区分という変数名を与えた。

また、本学部では前期入試・中期入試・後期入試において第二志望合格という制度があり、他の専攻を第一志望で希望したが不合格だった学生を、第二志望の専攻が合格とする場合がある。この志望の違いに志望区分という変数名を与えた。

入試成績に関わる入学試験の成績を得点化して比較することはこの種の分析では必須であるが、本学部では入試区分によって学力試験の科目数、配点、合計点がそれぞれ異なるため、全科目の合計を100点満点に換算し、入試得点率という変数名を与えた。また、入試得点（合計点）とは別の成績指標として、入試区分ごとの全受験者数を分母とした当該学生の順位を百分率で計算し入試順位率という変数名を与えた。ただし、内部推薦入試と指定校推薦入試は実質面接のみのため、入試得点率および入試順位率については欠損値としている。筆記試験における国語・英語・地理の得点は、すべて100点満点に換算した数値を入力し、選択していない（試験を受けていない）科目については欠損値とした。

以上の入試成績に関わる変数と比較・参照するための入学後の成績を代表する変数として、まず「人文地理概説A」および「人文地理概説B」という2つの科

目の得点および出席率を用いた。この科目は地理・環境専攻1年生の必修科目であるため、入学者全員が入学年の春期・秋期に必ず受講する。2008年度からは筆者が授業を担当しており、今年で8年目となる。春期(4～7月)に開講する「人文地理概説A」の授業目標は「地理学の目的と方法論を明確にし、人文地理学の多様性を紹介する」ことであり、毎年4月から始めの4～5回は「学問とは何か」「大学とは何を学ぶところか」「地理学とは何か」「地理学の目的と二つの方法論の存在」といった多分に哲学的・思索的な理屈めいた話題をできるだけ解りやすく噛み砕いて講義し、その後は人口地理学・都市地理学・経済地理学といった人文地理学を構成するさまざまなジャンルについて実例を示しながら紹介するというスタイルで構成している。秋期(9～1月)に開講する「人文地理概説B」は「人文地理概説A」と連続しており、政治地理学・社会地理学・文化地理学・歴史地理学などといった人文地理学を構成するジャンルを全授業期間にわたって紹介する内容となっている。どちらの科目も成績の評価は、学期中に提出する中間レポートと期末試験の結果を得点化して行っている。試験に関しては易しすぎずかといって難しすぎず、得点分布が(不合格者も含めて)正規分布に近づくように、また暗記を要求することは全く無く、講義内容に興味を持って真面目に取り組めば必ず合格できるような出題を心がけているつもりである。なお、この科目は必修なので、1年生で単位取得できなかった場合翌年再履修となるが、高学年次での得点および出席率のデータは、今回の分析からは省いた。

ところで、例年「人文地理概説A・B」を受講する60-75名の1年生のうち10名前後が期末試験を欠席しているが、得点の値としてはこれらの欠席者は欠損値として処理してある。しかし、いわゆるGPAの考え方に従えば、得点0点として換算すべきかもしれない。そこで、試験を欠席した学生に得点として0点を与えた場合の得点(0点換算)も変数とし、通常の得点を指標とした場合との比較も行うことにした。

つぎに「人文地理概説A・B」の得点が入学1年目の成績なのに対し、高学年の成績を示す変数として、2年成績総平均と4年成績総平均および卒論得点の3つの変数を設定した。2年および4年の成績総平均とは、各学年までに学生が単位を取得したすべての科目の評価平均である。ただし、GPAと違い、不可(59点以下)および欠席は評価の計算から除外されるため、最低点でも総平均は60点未満になることはない。また、取得単位数が少数であったために結果として評価平均が高くなる事例もあることから、留年または退学した学生および2年次までに取得科目数が10科目以下、4年次までに取得科目数が20科目以下の学生についてはこの変数の値を欠損値として扱った。なお、2008年度入学者の4年成績総平均と2010年度入学者の2年成績総平均については、資料が手に入らなかったため、すべて欠損値とし、関係する分析の対象からは除外した。

卒論得点は必修科目である卒業論文の評点のことで、100点満点で採点され、60点未満は不合格つまり留年となる。今回は60点未満の卒論については未提出者と同じく欠損値として扱い、点数は入力していない。したがってこの変数の最小値は60となる。

また、本学でも問題になっている退学者と、それに関連するであろう留年者に関する指標として、留年・退学という変数を設定した。これは当該学生が在学中に一度でも留年または退学したかどうかを示すカテゴリー型データである。

### 3. 「人文地理概説A・B」の成績と入試関連変数との関連

#### 1) 入学年度および性別による差異

「人文地理概説A・B」の得点および出席率について、入学年度を因子として一元配置分散分析を行った結果が表1である。分散分析の結果、「人文地理概説A・B」の得点と出席率のいずれについても入学年度間に有意な差が認められた。各入学年度間の比較を行うためTukeyのbによる検定を行った結果、「人文地理概説A」の得点と「人文地理概説A・B」の出席率について2010年の値が有意に低く、「人文地理概説A」の出席率については2009年の値が有意に高いこと、「人文地理概説B」の得点については2008年の値が他の年度と比べて有意に高く、2009年の値が有意に低いことが示された（検定結果の表は省略）。なお、欠席者を得点0点として換算した場合（表中の0点換算）は、「人文地理概説A・B」のいずれの得点についても2010年度の低さが有意に認められた。表1の2010年度の度数（受講者数=その年度の入学者数）を見るとわかるように、この年度は例年よりかなり多い82人が入学しているのだが、春期の「人文地理概説A」ですでに18名が期末試験を欠席しており、その半年後の「人文地理概説B」ではその数はさらに増えて31名が欠席している。このことから「人文地理概説B」の得点において2010年度入学者が有意に低い値を示すことがなかったのは見かけ上のことであり、成績の悪い学生がこの1年の間に大量にドロップアウトした結果「人文地理概説B」の平均点が上がったのだと理解できよう。この章の3節で述べるように「人文地理概説A・B」の得点と出席率の間には非常に強い正の相関があるので、2010年度の入学生のグループは何らかの理由で年度はじめから授業の出席率が悪く、その結果として成績も上がらず、さらに期末試験を受けることすら途中であきらめる学生が大量に生じたのではないかと予想される。

「人文地理概説A」および「人文地理概説B」の授業内容と期末試験の課題はこの8年間ほとんど変えることなく、最終的な評価についても毎年同程度の難易度になるように調整しているつもりなので、授業する側の方に年度ごとの大きな違いがなかったと仮定すると、2010年度の入学者に例年の入学者と異なる何か

表1 入学年度を因子とした「人文地理概説A・B」の  
得点および出席率についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
人文地理概説A得点	2008	64	70.69	15.482	5	95
	2009	68	69.38	17.849	25	98
	2010	64	58.22	17.194	20	90
	2011	49	69.10	12.149	30	95
	2012	49	67.29	16.401	12	100
	2013	66	66.20	14.008	30	90
	2014	50	63.66	12.077	40	90
	2015	65	61.60	19.115	10	90
	合計	475	65.70	16.334	5	100
人文地理概説A得点 (0点換算)	2008	76	59.53	29.573	0	95
	2009	74	63.76	25.612	0	98
	2010	82	45.44	28.597	0	90
	2011	67	50.54	32.554	0	95
	2012	59	55.88	29.511	0	100
	2013	74	59.04	24.557	0	90
	2014	60	53.05	26.335	0	90
	2015	75	53.39	27.576	0	90
	合計	567	55.04	28.481	0	100
人文地理概説A出席率	2008	76	91.32	17.723	.00	100.00
	2009	74	95.02	8.210	56.25	100.00
	2010	82	85.53	22.267	.00	100.00
	2011	67	90.05	17.482	25.00	100.00
	2012	59	87.92	20.264	12.50	100.00
	2013	74	92.86	11.524	35.71	100.00
	2014	60	87.74	17.795	21.43	100.00
	2015	75	86.97	25.417	.00	100.00
	合計	567	89.71	18.526	.00	100.00
人文地理概説B得点	2008	64	76.84	11.708	40	95
	2009	68	65.40	10.982	30	90
	2010	51	72.29	10.871	40	90
	2011	57	71.00	10.311	60	95
	2012	49	72.29	9.379	60	90
	2013	66	71.17	9.356	36	92
	2014	48	70.46	10.066	45	90
	合計	403	71.27	10.896	30	95
人文地理概説B得点 (0点換算)	2008	76	64.71	30.176	0	95
	2009	74	60.09	20.826	0	90
	2010	82	44.96	36.290	0	90
	2011	67	60.40	27.203	0	95
	2012	59	60.03	28.653	0	90
	2013	74	63.47	23.937	0	92
	2014	60	56.37	29.807	0	90
	合計	492	58.37	29.176	0	95
人文地理概説B出席率	2008	76	81.11	28.731	.00	100.00
	2009	74	84.80	23.825	.00	100.00
	2010	82	70.99	29.447	.00	100.00
	2011	67	84.50	27.031	.00	100.00
	2012	59	85.73	24.906	.00	100.00
	2013	74	88.15	17.970	15.38	100.00
	2014	60	79.23	28.723	.00	100.00
	合計	492	81.82	26.511	.00	100.00

表 1 入学年度を因子とした「人文地理概説 A・B」の  
得点および出席率についての分散分析結果（つづき）

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
人文地理概説 A 得点	グループ間	8103.454	7	1157.636	4.568	.000
	グループ内	118354.496	467	253.436		
	合計	126457.949	474			
人文地理概説 A 得点 (0点換算)	グループ間	17738.041	7	2534.006	3.209	.002
	グループ内	441391.105	559	789.608		
	合計	459129.146	566			
人文地理概説 A 出席率	グループ間	5437.340	7	776.763	2.300	.026
	グループ内	188811.819	559	337.767		
	合計	194249.159	566			
人文地理概説 B 得点	グループ間	4474.202	6	745.700	6.827	.000
	グループ内	43252.388	396	109.223		
	合計	47726.591	402			
人文地理概説 B 得点 (0点換算)	グループ間	20621.896	6	3436.983	4.195	.000
	グループ内	397349.291	485	819.277		
	合計	417971.187	491			
人文地理概説 B 出席率	グループ間	15059.212	6	2509.869	3.688	.001
	グループ内	330037.234	485	680.489		
	合計	345096.446	491			

があった可能性が残る。じつは、この2010年度の入学生は卒業までに47.6%の学生が留年または退学を経験することになる（この留年・退学率は今回対象とした8年間では最悪の数値）学年であったことが後にわかるのだが、その要因について今回の分析だけから判断することは難しい。

つぎに、「人文地理概説 A・B」の得点および出席について、性別を因子として一元配置分散分析を行った結果が表2である。この表からすべての変数において女子の平均が男子の平均を上回っていることはわかるが、検定の結果からはいずれも5%の水準で有意な差があるとまでは言えない。岡田（2003）や西丸（2013）に示されているように、一般に出席と成績については男子より女子のほうが良い成績を示す傾向が強いとされるが、今回の事例についてはこのことは積極的には当てはまらなかったようである。

## 2) 入試区分および志望区分による差異

「人文地理概説 A・B」の得点および出席について、入試区分を因子として一元配置分散分析を行った結果が表3である。分析の結果、「人文地理概説 A」得点および「人文地理概説 A」得点（0点換算）についてのみ、入試区分による5%水準未満の有意な差異が認められた。これら2つの変数について Tukey の b による検定と Dunnett の C による検定を用いて各入試区分間の多重比較を行った結果（検定結果の表は省略）、どちらの変数についても外国人入試グループの得点が高他のグループよりも有意に低いことが認められ、「人文地理概説 A」得点（0

表2 性別を因子とした「人文地理概説A・B」の  
得点率についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
人文地理概説A得点	男子	377	64.96	16.510	5	100
	女子	98	68.55	15.385	25	95
	合計	475	65.70	16.334	5	100
人文地理概説A得点 (0点換算)	男子	454	53.94	28.668	0	100
	女子	113	59.45	27.401	0	95
	合計	567	55.04	28.481	0	100
人文地理概説A出席率	男子	454	89.33	19.383	.00	100.00
	女子	113	91.21	14.561	.00	100.00
	合計	567	89.71	18.526	.00	100.00
人文地理概説B得点	男子	314	71.12	10.632	36	95
	女子	89	71.78	11.829	30	95
	合計	403	71.27	10.896	30	95
人文地理概説B得点 (0点換算)	男子	388	57.56	29.566	0	95
	女子	104	61.42	27.597	0	95
	合計	492	58.37	29.176	0	95
人文地理概説B出席率	男子	388	81.06	27.944	.00	100.00
	女子	104	84.68	20.150	.00	100.00
	合計	492	81.82	26.511	.00	100.00

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
人文地理概説A得点	グループ間	1004.384	1	1004.384	3.787	.052
	グループ内	125453.566	473	265.230		
	合計	126457.949	474			
人文地理概説A得点 (0点換算)	グループ間	2747.770	1	2747.770	3.402	.066
	グループ内	456381.377	565	807.755		
	合計	459129.146	566			
人文地理概説A出席率	グループ間	318.210	1	318.210	.927	.336
	グループ内	193930.949	565	343.241		
	合計	194249.159	566			
人文地理概説B得点	グループ間	29.684	1	29.684	.250	.618
	グループ内	47696.907	401	118.945		
	合計	47726.591	402			
人文地理概説B得点 (0点換算)	グループ間	1226.050	1	1226.050	1.442	.230
	グループ内	416745.137	490	850.500		
	合計	417971.187	491			
人文地理概説B出席率	グループ間	1072.621	1	1072.621	1.528	.217
	グループ内	344023.825	490	702.089		
	合計	345096.446	491			

点換算)については推薦等入試グループの得点が他のグループよりも高いことが有意に示された。

外国人入試グループが他のグループより得点が低かった要因としては、「人文地理概説A」の授業内容との関連が考えられる。前の章で述べたように「人文地理概説A」は、地理学の方法論に関する内容が重要な部分を占めており、期末試験で高い点を得るためには、地理学の目的とそれに伴う方法論についての思想史あるいは思索的な内容を理解できるだけの論理的思考力と語学力が要求される。

表3 入試区分を因子とした「人文地理概説A・B」の  
得点および出席率についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
人文地理概説A 得点	AO入試	71	64.79	15.060	20	95
	推薦等入試	53	71.77	15.118	35	98
	外国人入試	22	55.09	19.557	20	95
	前期入試	225	66.15	15.796	12	100
	中後期入試	40	64.43	14.749	30	95
	C方式入試	64	64.55	18.518	5	93
	合計	475	65.70	16.334	5	100
人文地理概説A 得点 (0点換算)	AO入試	78	58.97	23.527	0	95
	推薦等入試	61	62.36	28.193	0	98
	外国人入試	27	44.89	28.009	0	95
	前期入試	276	53.92	29.406	0	100
	中後期入試	53	48.62	30.762	0	95
	C方式入試	72	57.38	28.862	0	93
	合計	567	55.04	28.481	0	100
人文地理概説A 出席率	AO入試	78	92.28	14.109	18.75	100.00
	推薦等入試	61	92.33	15.056	23.08	100.00
	外国人入試	27	89.39	16.071	33.33	100.00
	前期入試	276	89.05	19.980	.00	100.00
	中後期入試	53	86.96	19.443	21.43	100.00
	C方式入試	72	89.37	19.753	.00	100.00
	合計	567	89.71	18.526	.00	100.00
人文地理概説B 得点	AO入試	63	69.78	11.937	30	92
	推薦等入試	51	73.02	11.735	40	95
	外国人入試	19	70.63	10.001	55	90
	前期入試	187	71.68	10.616	36	95
	中後期入試	37	68.72	8.729	48	85
	C方式入試	46	72.35	11.328	40	90
	合計	403	71.27	10.896	30	95
人文地理概説B 得点 (0点換算)	AO入試	70	62.80	23.929	0	92
	推薦等入試	56	66.50	23.804	0	95
	外国人入試	26	51.62	33.058	0	90
	前期入試	234	57.29	30.304	0	95
	中後期入試	47	53.72	29.268	0	85
	C方式入試	59	56.41	31.847	0	90
	合計	492	58.37	29.176	0	95
人文地理概説B 出席率	AO入試	70	86.81	20.753	.00	100.00
	推薦等入試	56	88.16	20.322	.00	100.00
	外国人入試	26	75.63	29.210	.00	100.00
	前期入試	234	80.00	29.025	.00	100.00
	中後期入試	47	81.46	25.594	.00	100.00
	C方式入試	59	80.16	25.924	.00	100.00
	合計	492	81.82	26.511	.00	100.00

その結果、日本人の学生でも簡単には理解できない学生が少なからずおり、そのために「人文地理概説A」の得点は全体でも「人文地理概説B」のそれより平均点で5点以上低くなっているのだと考えられる。この点を考慮すると、大学1年目の日本語を母語としない学生にとって日本語で論述問題に解答することは、ある程度負担の大きい作業であることは十分に理解できる。このような「人文地理



表3 入試区分を因子とした「人文地理概説A・B」の  
得点および出席率についての分散分析結果（つづき）

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
人文地理概説A得点	グループ間	4685.223	5	937.045	3.609	.003
	グループ内	121772.727	469	259.643		
	合計	126457.949	474			
人文地理概説A得点 (0点換算)	グループ間	10177.735	5	2035.547	2.544	.027
	グループ内	448951.411	561	800.270		
	合計	459129.146	566			
人文地理概説A出席率	グループ間	1463.356	5	292.671	.852	.514
	グループ内	192785.803	561	343.647		
	合計	194249.159	566			
人文地理概説B得点	グループ間	728.670	5	145.734	1.231	.294
	グループ内	46997.921	397	118.383		
	合計	47726.591	402			
人文地理概説B得点 (0点換算)	グループ間	7778.375	5	1555.675	1.843	.103
	グループ内	410192.812	486	844.018		
	合計	417971.187	491			
人文地理概説B出席率	グループ間	5935.500	5	1187.100	1.701	.133
	グループ内	339160.945	486	697.862		
	合計	345096.446	491			

概説A」の授業内容の特徴は日本人にも当てはまり、推薦等入試グループが有意に他のグループより高い点を得ていることは、あるていど複雑な授業内容を理解するだけの語学力や思考力を高校卒業時点で持っている学生が多いことを示しているのではないと思われる。

また出席率に関しては、有意な差は認められないものの「人文地理概説A・B」ともに推薦等入試とAO入試のグループが他のグループより出席率が高い傾向にあることが読み取れる。この結果は、専願制の推薦入学者は欠席が少なく、学業成績も良い傾向があるという岡田（2003）の報告と合致している。ただし、推薦等入試グループの得点が明らかに高いことは、彼らがわりと真面目に授業に取り組み授業内容を理解していることを暗に示しているが、AO入試グループでは高い出席率が高い得点に必ずしもつながっておらず、このことはAO入試グループの理解力や論理的思考力（といった基礎学力）の不足を示している可能性がある。

なお、どの年度においても入試区分中最大のグループは前期入試による入学者であることから、参考までに、前期入学者のサブグループであるA日程による入学者、B日程による入学者、デリバリー入試による入学者の3グループについて「人文地理概説A・B」の得点および出席率について平均に差があるのかどうかを一元配置分散分析で確認してみた（結果の表は省略）。その結果、得点・得点（0点換算）・出席率のいずれについても有意な差はまったく見られなかった。これら3種の入試については、併願して片方だけ合格する学生や、デリバリー入試で

表4 志望区分を因子とした「人文地理概説A・B」の  
得点率についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
人文地理概説A 得点	第一志望	455	65.88	16.323	5	100
	第二志望	20	61.50	16.433	20	95
	合計	475	65.70	16.334	5	100
人文地理概説A 得点 (0点換算)	第一志望	542	55.31	28.453	0	100
	第二志望	25	49.20	29.055	0	95
	合計	567	55.04	28.481	0	100
人文地理概説A 出席率	第一志望	542	89.94	18.206	.00	100.00
	第二志望	25	84.62	24.363	15.38	100.00
	合計	567	89.71	18.526	.00	100.00
人文地理概説B 得点	第一志望	387	71.18	11.037	30	95
	第二志望	16	73.25	6.547	60	82
	合計	403	71.27	10.896	30	95
人文地理概説B 得点 (0点換算)	第一志望	470	58.61	28.959	0	95
	第二志望	22	53.27	33.846	0	82
	合計	492	58.37	29.176	0	95
人文地理概説B 出席率	第一志望	470	81.80	26.639	.00	100.00
	第二志望	22	82.37	24.174	15.38	100.00
	合計	469	81.82	26.511	.00	100.00

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
人文地理概説A 得点	グループ間	368.123	1	368.123	1.381	.241
	グループ内	126089.826	473	266.575		
	合計	126457.949	474			
人文地理概説A 得点 (0点換算)	グループ間	891.602	1	891.602	1.099	.295
	グループ内	458237.544	565	811.040		
	合計	459129.146	566			
人文地理概説A 出席率	グループ間	676.217	1	676.217	1.974	.161
	グループ内	193572.941	565	342.607		
	合計	194249.159	566			
人文地理概説B 得点	グループ間	65.616	1	65.616	.552	.458
	グループ内	47660.974	401	118.855		
	合計	47726.591	402			
人文地理概説B 得点 (0点換算)	グループ間	599.300	1	599.300	.704	.402
	グループ内	417371.887	490	851.779		
	合計	417971.187	491			
人文地理概説B 出席率	グループ間	6.801	1	6.801	.010	.922
	グループ内	345089.645	490	704.265		
	合計	345096.446	491			

は受験科目として地理が課されないことなどから、選抜方法として平等に扱って  
もいいのかという危惧があったように思うが、この結果を見るかぎりどの日程で  
合格しても大した違いはないという結果となった。

つぎに、「人文地理概説A・B」の得点および出席について、志望区分を因子  
として一元配置分散分析を行った結果が表4である。分析の結果、地理・環境  
専攻が第一志望であった学生と他専攻が第一志望であった学生との間には、どの  
変数についても有意な差は認められなかった。たしかに第二志望のグループは、

「人文地理概説A・B」の得点においていずれも第一志望のグループより若干点が低い、これは誤差の範囲であり、「人文地理概説B」の出席率についてはむしろ優っている（もちろん有意な差ではない）。一般に第二志望入学はいわゆる不本意入学ではないかという指摘があるが、少なくともこの結果を見る限り、そのような兆候は見られない。

### 3) 入試成績および学籍番号との関連

入学試験の成績を示す数量データである、入試得点率、入試順位率、筆記試験における国語・英語・地理の得点と「人文地理概説A・B」の得点および出席率との相関分析の結果を示したものが表5である。この結果からはいくつか興味深い特徴を読み取ることができる。

「人文地理概説A」の得点は入試得点率 ( $p < 5\%$ ) および入試順位率 ( $p < 1\%$ ) との間に有意な相関があるのに対し、「人文地理概説B」の得点はこの両者との間に有意な相関がない。また、「人文地理概説A」の得点が入試の国語と英語の得点との間に有意な相関（ともに  $p < 5\%$ ）が認められ、地理の得点とは無相関なのに対し、「人文地理概説B」の成績は地理の成績との間に非常に強い相関（ $p < 1\%$ ）が認められる。これは前述した講義内容の違いに起因するものと考えられる。「人文地理概説A」の授業および期末試験において受講者に要求しているものは、いわゆる一般の地理の授業にあるような個々の地理的事象ではなく、地理学の目的とそれに伴う方法論についての思索的・哲学的な内容の理解である。このため、大学入試で問われるような地理の知識よりも、国語の試験で問われるような読解力のほうが必要とされるということなのだろう。逆に、「人文地理概説B」では人文地理の各論を具体的な事例とともに講義し、期末試験もその内容に依拠したものにしているため、地理的知識ないしは地理学に対する興味が多い学生ほど「人文地理概説B」の得点が高くなるのではないかと考えられる。ただしこれが当てはまるのは欠席を欠損値とした得点のみであり、「人文地理概説A・B」ともに（0点換算）得点の間にはいずれもまったく相関が見られない。このことは、期末試験を欠席した（悪い言い方をすればドロップアウトした）学生の欠席の理由が、いわゆる学力不足だけであるとはかぎらないことを示している可能性がある。

その一方で「人文地理概説A・B」の得点および出席率の相互間にはどれもほぼ完璧な正の相関があり、「人文地理概説A」と「人文地理概説B」の授業内容の違いにかかわらず、この2科目の成績には整合性があること、同時に真面目に出席することが良い成績につながることを示している。

ところで、国語・英語・地理の得点が入試得点率および入試順位率と強い相関があるのは当然だが、この3科目相互の相関は全くといっていいほどない。3教

表5 「人文地理概説A・B」の得点および出席率と入試成績および学籍番号との相関分析結果

人文地理概説A得点 有意確率(両側) 度数	Pearsonの相関係数	人文地理概説A		人文地理概説A		人文地理概説B		人文地理概説B		入試得点率	入試順位率
		得点	出席率	得点(0点換算)	出席率	得点	出席率	得点(0点換算)	出席率		
人文地理概説A得点		1	1.000**	.407**	.000	.408**	.000	.223**	.098*	.098*	-.192**
人文地理概説A得点 (0点換算)		475	.475	.382	.422**	.699**	.613**	.613**	.452	.452	.430
人文地理概説A出席率		.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.013	.013	.009
人文地理概説A出席率		.475	.567	.154**	.593**	.530**	.664**	.664**	.540	.540	.515
人文地理概説B得点		.000	.000	.002	.000	.000	.000	.000	.360	.360	.810
人文地理概説B得点		.475	.567	.407**	.422**	.699**	.613**	.613**	.492	.492	.515
人文地理概説B得点 (0点換算)		.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.065	.065	-.083
人文地理概説B得点 (0点換算)		.475	.408**	.403	.699**	.530**	.795**	.795**	.204	.204	.113
人文地理概説B出席率		.223**	.613**	.325**	.613**	.664**	.664**	.664**	.470	.470	.447
入試得点率		.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.204	.204	.465
入試得点率		.410	.492	.403	.492	.492	.492	.492	.470	.470	.447
入試順位率		.098*	.107*	.065	.068	.068	.059	.059	.1	.1	-.520**
国語得点		.038	.013	.204	.360	.142	.204	.204	.540	.540	.512
英語得点		.452	.540	.382	.540	.470	.470	.470	.557**	.557**	-.398**
地理得点		.192*	.114**	.083	.011	.061	.035	.035	.642**	.642**	-.381**
学籍番号		.000	.009	.113	.810	.200	.465	.465	.000	.000	.000
学籍番号		.430	.515	.364	.515	.447	.447	.447	.512	.512	.515
学籍番号		.129*	.087	.092	.088	.058	.024	.024	.662	.662	-.398**
学籍番号		.021	.088	.138	.685	.294	.662	.662	.000	.000	.000
学籍番号		.319	.386	.263	.386	.326	.386	.386	.386	.386	.362
学籍番号		.116*	.016	.060	.003	.027	.072	.072	.642**	.642**	-.381**
学籍番号		.038	.750	.330	.947	.628	.191	.191	.000	.000	.000
学籍番号		.322	.391	.266	.391	.330	.330	.330	.391	.391	.367
学籍番号		.033	.002	.256**	.033	.068	.014	.014	.498**	.498**	-.534**
学籍番号		.712	.978	.008	.687	.439	.872	.872	.000	.000	.000
学籍番号		.128	.154	.107	.154	.133	.133	.133	.154	.154	.152
学籍番号		.081	-.166**	-.027	-.134**	-.170**	-.160**	-.160**	-.254	-.254	-.115**
学籍番号		.078	.000	.591	.001	.000	.000	.000	.000	.000	.009
学籍番号		.475	.567	.403	.567	.492	.492	.492	.540	.540	.515

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)。  
\* 相関係数は5%水準で有意(両側)。

科全てで低い点を取った学生が本専攻に合格しなかつただけでなく、全てで高得点を取った学生もまた入学していないから（つまり合格しても辞退した）と見ることができる。

なお参考までに、学籍番号との相関についても求めてみた。というのも毎年成績をつけるにあたって、学生の名簿順と成績との間に何となく関連性のようなものがある感じがしていたからである。するとやはり「人文地理概説A」得点（0点換算）と「人文地理概説B」得点（0点換算）との間に非常に強い負の相関が現れた（ともに  $p < 1\%$ ）。これは学生番号が若いほど「人文地理概説A・B」の成績が良く、番号が下がるにしたがって成績が悪くなる傾向にあることを示している。ただし、学籍番号と「人文地理概説A・B」の得点との間にはまったく相関が見られないことから、最終的に期末試験を欠席する学生が、名簿（学籍番号）の前半より後半のほうに多くいることを示しているようだ。「人文地理概説A・B」の出席率がともに学籍番号と強い負の相関を示すことも、これを裏付けている。学籍番号が後ろの学生になるほど、授業を欠席することが多い傾向があり、ついには期末試験を欠席しドロップアウトする可能性が高いのである。

その理由について確証はないが、学籍番号は入学手続き（前期納入金の支払い）をした順番に付けられることから、番号の若い学生は早い時期に本学本専攻への入学を決めた学生であるのに対し、番号が大きい学生は4月1日の新学年スタートぎりぎりまで進路を迷っていた学生である可能性は高い。そのような学生の中に、希望していた他大学への道が全て閉ざされ、新年の3月になっても進路が決まらず、「浪人するよりはまし」と本学へ駆け込みで入学した学生がいるとしたら、それぞれ不本意入学に近いわけで、本人の学力レベルとは関係なく、少なくとも大学生活を維持するモチベーションは低下するだろうことが予想される。

#### 4. 2年次以降の成績と入試関連変数との関連

##### 1) 入学年度および性別による差異

2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点について入学年度を因子として一元配置分散分析を行った結果が表6である。その結果、2年成績総平均と4年成績総平均については入学年度により有意な差は認められなかったが、卒論点数についてはのみは、2008年度および2011年度と2009年度および2010年度との間に有意な差が認められた。この差が入学年度間の学生の資質の差異によるものなのか、採点基準のばらつきによるものなのかはこのデータからだけでは不明である。

2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点について、性別を因子として一元配置分散分析を行った結果が、表7である。4年成績総平均については女子の平均が男子の平均を上回っており、5%の水準で有意な差が認められる。今回の分析で唯一性別に関して現れた有意な成績の差である。ただし、2年成績総平均に

表6 入学年度を因子とした2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
2年成績総平均	2009	65	77.00	4.098	67.8	86.4
	2010	75	76.04	3.430	69.5	85.1
	2011	62	76.85	4.674	66.3	87.5
	2012	55	76.95	5.218	69.3	93.0
	2013	68	76.12	4.692	67.3	90.0
	2014	54	76.02	4.324	68.4	86.3
	合計	379	76.48	4.391	66.3	93.0
4年成績総平均	2008	62	78.25	4.323	70.1	87.0
	2009	61	77.72	3.873	72.0	85.9
	2011	54	76.92	3.932	70.1	84.7
	2012	48	77.43	4.928	71.4	89.8
	2013	64	76.47	4.636	67.0	89.2
	合計	289	77.36	4.359	67.0	89.8
卒論得点	2008	48	74.52	5.885	60	90
	2009	52	72.19	6.630	60	85
	2010	43	72.16	6.828	60	85
	2011	46	75.22	6.762	60	90
	合計	189	73.51	6.619	60	90

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
2年成績総平均	グループ間	72.349	5	14.470	.748	.588
	グループ内	7214.210	373	19.341		
	合計	7286.559	378			
4年成績総平均	グループ間	118.894	4	29.724	1.577	.181
	グループ内	5354.282	284	18.853		
	合計	5473.176	288			
卒論得点	グループ間	351.474	3	117.158	2.749	.044
	グループ内	7885.743	185	42.626		
	合計	8237.217	188			

については男女間の差はほとんど無く、卒論得点に関してはほんのわずかながら男子の平均が女子のそれを上回っている。もちろん5%水準での有意な差ではない。

## 2) 入試区分および志望区分による差異

2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点について入試区分を因子として一元配置分散分析を行った結果が表8である。分析の結果、4年成績総平均については入試区分による有意な差異が認められ ( $p < 5\%$ )、Tukeyのbによる検定を用いて入試区分間の成績の比較を行った結果、C方式入試のグループが他のグループより有意に高く、また中後期入試のグループが他のグループより有意に低いことが認められた。

3章の1節で、2010年度の入学生の入学後の成績が芳しくなく、結果としてこの学年は卒業までに留年・退学率が47.6%にまで達したことを紹介した。この

表7 性別を因子とした2年成績総平均、4年成績総平均、  
卒論得点についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
2年成績総平均	男子	296	76.40	4.468	66.3	93.0
	女子	83	76.77	4.115	67.8	89.3
	合計	379	76.48	4.391	66.3	93.0
4年成績総平均	男子	227	77.06	4.381	67.0	89.2
	女子	62	78.47	4.126	71.9	89.8
	合計	289	77.36	4.359	67.0	89.8
卒論得点	男子	137	73.66	6.661	60	90
	女子	52	73.12	6.555	60	90
	合計	189	73.51	6.619	60	90

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
2年成績総平均	グループ間	9.006	1	9.006	.467	.495
	グループ内	7277.554	377	19.304		
	合計	7286.559	378			
4年成績総平均	グループ間	97.226	1	97.226	5.191	.023
	グループ内	5375.950	287	18.732		
	合計	5473.176	288			
卒論得点	グループ間	11.354	1	11.354	.258	.612
	グループ内	8225.862	187	43.989		
	合計	8237.217	188			

2010年度は今回対象とした8年間で1学年の学生数が最も多い(82名)入学年なのだが、その大きな原因は中期入試で20人もの大量の入学者が出たことであった。このデータだけで軽々しく予断することはできないが、中期入試での合格ラインを下げたことがこの学年のその後の留年・退学率に影響を及ぼしていることは、可能性の一つとして考えられる。

また、2年成績総平均と卒論得点については入試区分間の有意な差は認められなかったが、どちらもC方式入試グループの平均がグループ間でいちばん成績が良く、中後期入試グループの成績が総じて良くない傾向が見て取れた。これらの傾向は第3章で見た「人文地理概説A・B」の得点における分析結果とはかなり異なっている。とくに「人文地理概説A・B」の成績では明らかに低かった外国人入試グループの成績は、C方式入試グループに次いで優秀であることがわかる。ただし、卒論得点に関しては外国人入試グループの成績が最も悪く、これは留学生の日本語能力が卒論の評価にかなり大きな影響を及ぼしていることを示唆している。

次に、2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点について入試区分を因子として一元配置分散分析を行った結果が表9である。前章で見た「人文地理概説A・B」の成績との関連と同じく、どの変数についても地理・環境専攻が第一志望であったか他専攻が第一志望であったでは、有意な差は認められなかった。たしか

表8 入試区分を因子とした2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
2年成績総平均	AO入試	58	75.85	4.356	69.2	86.6
	推薦等入試	45	76.44	4.938	66.3	90.0
	外国人入試	21	76.79	3.125	70.1	81.7
	前期入試	176	76.60	4.343	67.3	87.5
	中後期入試	39	75.62	3.887	68.1	85.0
	C方式入試	40	77.58	4.955	69.0	93.0
	合計	379	76.48	4.391	66.3	93.0
4年成績総平均	AO入試	42	76.69	3.987	71.4	87.0
	推薦等入試	35	78.38	4.676	71.6	89.8
	外国人入試	14	77.65	3.869	72.0	84.2
	前期入試	138	77.17	4.563	67.0	88.0
	中後期入試	35	76.19	3.695	70.1	84.1
	C方式入試	25	79.58	3.739	71.4	84.9
	合計	289	77.36	4.359	67.0	89.8
卒論得点	AO入試	22	73.77	5.282	63	85
	推薦等入試	24	74.08	5.250	65	85
	外国人入試	16	70.81	7.943	60	87
	前期入試	76	73.55	6.996	60	90
	中後期入試	26	72.96	7.464	60	90
	C方式入試	25	74.92	5.859	63	90
	合計	189	73.51	6.619	60	90

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
2年成績総平均	グループ間	105.301	5	21.060	1.094	.363
	グループ内	7181.258	373	19.253		
	合計	7286.559	378			
4年成績総平均	グループ間	231.933	5	46.387	2.505	.031
	グループ内	5241.243	283	18.520		
	合計	5473.176	288			
卒論得点	グループ間	183.491	5	36.698	.834	.527
	グループ内	8053.725	183	44.009		
	合計	8237.217	188			

に第二志望のグループは、いずれの成績も第一志望のグループより若干点が低いが、有意な差とは認められない。

### 3) 入試成績および「人文地理概説A・B」の成績との関連

入学試験の成績を示す数量データである、入試得点率、入試順位率、筆記試験における国語・英語・地理の点数と2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点との相関分析の結果を示したものが表10である。この結果を見ると、2年成績総平均も4年成績総平均も、入試得点率および入試順位率と非常に強い相関があり、さらに国語と英語の成績とも強い相関を持つことがわかる。つまり、大学での学業成績については、入学後2年はもちろん4年経っても入試時の成績の良し悪しによって決まると言っても差し支えないことになる。



表9 志望区分を因子とした2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
2年成績総平均	第一志望	362	76.50	4.441	66.3	93.0
	第二志望	17	76.01	3.180	70.7	80.7
	合計	379	76.48	4.391	66.3	93.0
4年成績総平均	第一志望	277	77.45	4.396	67.0	89.8
	第二志望	12	75.29	2.780	71.4	79.3
	合計	289	77.36	4.359	67.0	89.8
卒論得点	第一志望	181	73.54	6.479	60	90
	第二志望	8	73.00	9.856	63	90
	合計	189	73.51	6.619	60	90

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
2年成績総平均	グループ間	3.960	1	3.960	.205	.651
	グループ内	7282.599	377	19.317		
	合計	7286.559	378			
4年成績総平均	グループ間	53.535	1	53.535	2.835	.093
	グループ内	5419.641	287	18.884		
	合計	5473.176	288			
卒論得点	グループ間	2.200	1	2.200	.050	.823
	グループ内	8235.017	187	44.038		
	合計	8237.217	188			

一方、卒論得点に関しては、入試順位率とは強い相関があるのに入試得点率については有意な相関がないという不思議な結果となった。さらに残念なことには、地理の得点は2年成績総平均との間に正の相関 ( $p < 5\%$ ) があるのみで、4年成績総平均はもとより卒論得点との間にも全く相関がないことも明らかとなった。その理由として、よく言われるように高校の地理と大学の地理学が必ずしも同じではないことのほかに、地理を選択する受験者の数が多くないこと（今回のデータでは567名中154名のみが地理の問題で受験した）も関係しているのではないかと思われる。

最後に、2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点と「人文地理概説A・B」の得点および出席率との相関について見てみた（表11）。結果は、2年成績総平均と4年成績総平均については、「人文地理概説A・B」の得点および出席率ともにほぼ完璧な正の相関が見られた一方で、卒論得点との間には「人文地理概説A・B」の得点のみに相関が認められた。

なお、「人文地理概説A・B」の得点の場合と違い、2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点と学籍番号との関連性は一切見られなかった。これは留年または退学を経験した学生についてはデータ上欠損値として扱ったためであり、4年

表 10 2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点と  
入試成績との相関分析結果

		入試得点率	入試順位率	国語得点	英語得点	地理得点	学籍番号
2年成績総平均	Pearson の相関係数	.215**	-.315**	.182**	.286**	.231**	.049
	有意確率 (両側)	.000	.000	.005	.000	.027	.343
	度数	361	344	242	245	92	379
4年成績総平均	Pearson の相関係数	.251**	-.341**	.218**	.241**	.209	.012
	有意確率 (両側)	.000	.000	.002	.001	.060	.839
	度数	274	262	194	197	82	289
卒論得点	Pearson の相関係数	.106	-.273**	.217**	.118	-.112	-.034
	有意確率 (両側)	.155	.000	.000	.196	.442	.642
	度数	180	171	121	122	49	189

\*\* 相関係数は 1%水準で有意 (両側)。

\* 相関係数は 5%水準で有意 (両側)。

表 11 2年成績総平均、4年成績総平均、卒論得点と  
「人文地理概説 A・B」の得点および出席率との相関分析結果

		2年成績総平均	4年成績総平均	卒論得点	学籍番号
2年成績総平均	Pearson の相関係数	1	.921**	.443**	.049
	有意確率 (両側)		.000	.000	.343
	度数	379	226	141	379
4年成績総平均	Pearson の相関係数	.921**	1	.458**	.012
	有意確率 (両側)	.000		.000	.839
	度数	226	289	146	289
卒論得点	Pearson の相関係数	.443**	.458**	1	-.034
	有意確率 (両側)	.000	.000		.642
	度数	141	146	189	189
学籍番号	Pearson の相関係数	.049	.012	-.034	1
	有意確率 (両側)	.343	.839	.642	
	度数	379	289	189	567
人文地理概説 A 得点	Pearson の相関係数	.463**	.524**	.324**	-.081
	有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.078
	度数	332	267	175	475
人文地理概説 A 得点 (0点換算)	Pearson の相関係数	.397**	.436**	.182**	-.166**
	有意確率 (両側)	.000	.000	.012	.000
	度数	379	289	189	567
人文地理概説 A 出席率	Pearson の相関係数	.194**	.196**	-.043	-.134**
	有意確率 (両側)	.000	.001	.557	.001
	度数	379	289	189	567
人文地理概説 B 得点	Pearson の相関係数	.443**	.484**	.248**	-.027
	有意確率 (両側)	.000	.000	.001	.591
	度数	327	273	175	403
人文地理概説 B 得点 (0点換算)	Pearson の相関係数	.290**	.366**	.186*	-.170**
	有意確率 (両側)	.000	.000	.010	.000
	度数	379	289	189	492
人文地理概説 B 出席率	Pearson の相関係数	.224**	.245**	.069	-.160**
	有意確率 (両側)	.000	.000	.347	.000
	度数	379	289	189	492

\*\* 相関係数は 1%水準で有意 (両側)。

\* 相関係数は 5%水準で有意 (両側)。

次はもとより2年次終了の時点で、勉強意欲を喪失した学生や学力不足で付いてこられなかった学生は同じ入学年のグループから淘汰されてしまったことを予想させる。

## 5. 学生の留年・退学から見た諸変数との関連

### 1) カテゴリー変数とのクロス表分析

留年者（休学による留年を含む）および退学者（除籍を含む）についてのデータは、当該学年が4年間在籍して卒業しないと正確な数字がわからないことから、以下の分析ではすでに卒業した学年より古い年度のデータ、つまり2008～2011年度に入学した299名を対象とする。

同年度に入学した学生のうち留年または退学を経験した学生の数を、入学年度によってクロス集計したものが表12である。年度によって留年・退学者の割合は29.7%から47.6%と、かなりの開きがあるが、カイ2乗検定の結果、 $p < 5\%$ の有意確率でも年度ごとの有意な差は認められなかった。つぎに、性別と留年・退学者とのクロス集計表が表13である。こちらも女子よりも男子のほうが留年・退学をする傾向が高いが、カイ2乗検定の結果からは有意な差は認められなかった。

入試区分別に留年・退学者の数をクロス集計したものが表14である。表からはAO入試グループやC方式入試グループの留年・退学率が高いことがわかるが、カイ2乗検定の結果からは有意な差はまったく認められなかった。同様に、志望区分別に留年・退学者の数をクロス集計したものが表15である。こちらもカイ2乗検定の結果からは有意な差はまったく認められなかった。

従来、学力試験を伴わないAO入試や推薦入試による入学者は、一般入試による入学者と比べて基礎学力が劣るのではないかと考えられることも多く、その結果大学の授業に着いていけず留年する例が多いのではないかと、あるいは第二志望合格者はある種の不本意入学であるために入学しても勉強意欲が湧かず、結果的に不登校や他大学受験で留年・退学する例が多いのではないかと、といった憶測を聞いたこともあるが、少なくとも今回の分析においては、これらの仮説を実証することはできなかった。

### 2) 入試成績および学籍番号との関連

入試得点率、入試順位率、筆記試験における国語・英語・地理の得点および学籍番号について、留年・退学を因子として一元配置分散分析を行った結果が表16である。分析の結果、入試成績に関する全ての変数において、留年・退学した学生の成績は留年・退学しなかった学生より劣っているが、いずれも有意な差とは認められなかった。学籍番号についても、留年・退学者の番号はそうでない学生の番号より大きな値を取るが、分析の結果からは有意な差は認められなかった。

表 12 留年・退学と入試年度とのクロス表

			留年退学		合計
			留年退学なし	留年退学あり	
入学年度	2008	度数	48	28	76
		入学年度の%	63.2%	36.8%	100.0%
	2009	度数	52	22	74
		入学年度の%	70.3%	29.7%	100.0%
	2010	度数	43	39	82
		入学年度の%	52.4%	47.6%	100.0%
	2011	度数	46	21	67
		入学年度の%	68.7%	31.3%	100.0%
合計		度数	189	110	299
		入学年度の%	63.2%	36.8%	100.0%

カイ 2 乗検定

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Person のカイ 2 乗	6.532 <sup>a</sup>	3	.088
尤度比	6.475	3	.091
線型と線形による連関	.027	1	.871
有効なケースの数	299		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 24.65 です。

表 13 留年・退学と性別とのクロス表

			留年退学		合計
			留年退学なし	留年退学あり	
性別	男子	度数	137	89	226
		性別の%	60.6%	39.4%	100.0%
	女子	度数	52	21	73
		性別の%	71.2%	28.8%	100.0%
合計		度数	189	110	299
		性別の%	63.2%	36.8%	100.0%

カイ 2 乗検定

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Person のカイ 2 乗	2.673 <sup>a</sup>	1	.102
尤度比	2.742	1	.098
線型と線形による連関	2.664	1	.103
有効なケースの数	299		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 26.86 です。

表 14 留年・退学と入試区分とのクロス表

			留年退学		合計
			留年退学なし	留年退学あり	
入試区分 (6 区分)	AO 入試	度数	22	16	38
		入試区分 (6 区分) の%	57.9%	42.1%	100.0%
	推薦等入試	度数	24	14	38
		入試区分 (6 区分) の%	63.2%	36.8%	100.0%
	外国人入試	度数	16	7	23
		入試区分 (6 区分) の%	69.6%	30.4%	100.0%
	前期入試	度数	76	47	123
		入試区分 (6 区分) の%	61.8%	38.2%	100.0%
	中後期入試	度数	26	9	35
		入試区分 (6 区分) の%	74.3%	25.7%	100.0%
	C 方式入試	度数	25	17	42
		入試区分 (6 区分) の%	59.5%	40.5%	100.0%
合計		度数	189	110	299
		入試区分 (6 区分) の%	63.2%	36.8%	100.0%

カイ 2 乗検定

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Person のカイ 2 乗	3.060 <sup>a</sup>	5	.691
尤度比	3.161	5	.675
線型と線形による連関	.182	1	.669
有効なケースの数	299		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 8.46 です。

表 15 留年・退学と志望区分とのクロス表

			留年退学		合計
			留年退学なし	留年退学あり	
志望区分	第一志望	度数	181	104	285
		志望区分の%	63.5%	36.5%	100.0%
	第二志望	度数	8	6	14
		志望区分の%	57.1%	42.9%	100.0%
合計		度数	189	110	299
		志望区分の%	63.2%	36.8%	100.0%

カイ 2 乗検定

	値	df	漸近有意確率 (両側)
Person のカイ 2 乗	.233 <sup>a</sup>	1	.630
尤度比	.228	1	.843
線型と線形による連関	.232	1	.630
有効なケースの数	299		

a. 0 セル (.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 5.15 です。

### 3) 学内成績との関連

「人文地理概説A・B」の得点および出席率について、留年・退学を因子として一元配置分散分析を行った結果が表 17 である。分析の結果、すべての変数において留年・退学者の得点・出席率ともに低く、それ以外のグループとの間に明らかな差異が認められた。

同様に 2 年成績総平均、4 年成績総平均について、留年・退学を因子として一元配置分散分析を行った結果が表 18 である。分析の結果、どちらの変数につい

表 16 留年・退学を因子とした入試成績および学籍番号についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
入試得点率	留年退学なし	409	60.82	9.150	30.67	87.50
	留年退学あり	131	59.15	9.454	40.00	86.50
	合計	540	60.41	9.244	30.67	87.50
入試順位率	留年退学なし	391	46.15	23.898	4.76	100.00
	留年退学あり	124	46.82	21.570	3.57	100.00
	合計	515	46.31	23.340	3.57	100.00
国語得点	留年退学なし	295	62.92	12.960	29	91
	留年退学あり	91	60.40	13.110	30	88
	合計	386	62.33	12.997	29	91
英語得点	留年退学なし	299	50.79	12.533	16	81
	留年退学あり	92	48.32	13.749	19	82
	合計	391	50.21	12.854	16	82
地理得点	留年退学なし	117	66.32	11.553	35	95
	留年退学あり	37	68.22	11.555	44	86
	合計	154	66.78	11.544	35	95
学籍番号	留年退学なし	430	37.49	22.789	1	87
	留年退学あり	137	38.97	22.016	1	86
	合計	567	37.85	22.595	1	87

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
入試得点率	グループ間	276.579	1	276.579	3.250	.072
	グループ内	45782.172	538	85.097		
	合計	46058.751	539			
入試順位率	グループ間	41.194	1	41.194	.075	.784
	グループ内	279955.872	513	545.723		
	合計	279997.066	514			
国語得点	グループ間	443.310	1	443.310	2.635	.105
	グループ内	64591.636	384	168.207		
	合計	65034.946	385			
英語得点	グループ間	428.746	1	428.746	2.606	.107
	グループ内	64010.517	389	164.551		
	合計	64439.262	390			
地理得点	グループ間	100.565	1	100.565	.753	.387
	グループ内	20289.928	152	133.486		
	合計	20390.494	153			
学籍番号	グループ間	228.326	1	228.326	.447	.504
	グループ内	288725.325	565	511.018		
	合計	288953.651	566			

でも留年・退学者の成績は低く、それ以外のグループとの間に有意な差異が認められた。

このことは、学生の個人属性や入試の成績という変数からは入学後の留年・退学は予測し得ないのに対し、大学での全般的な成績（2年成績総平均、4年成績総平均）はもちろん、入学1年目の科目の成績（例えば「人文地理概説A・B」）ですら、学生のその後の留年・退学についてある程度だが説明できることを表している。その因果関係については、出席状況の悪いことが原因で成績が振るわず、

表 17 留年・退学を因子とした「人文地理概説A・B」の  
得点および出席率についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
人文地理概説A得点	留年退学なし	392	66.76	15.680	10	100
	留年退学あり	83	60.70	18.416	5	98
	合計	475	65.70	16.334	5	100
人文地理概説A得点 (0点換算)	留年退学なし	430	60.86	24.165	0	100
	留年退学あり	137	36.77	33.027	0	98
	合計	567	55.04	28.481	0	100
人文地理概説A出席率	留年退学なし	430	92.77	14.416	.00	100.00
	留年退学あり	137	80.09	25.491	.00	100.00
	合計	567	89.71	18.526	.00	100.00
人文地理概説B得点	留年退学なし	326	72.34	9.990	40	95
	留年退学あり	77	66.71	13.239	30	95
	合計	403	71.27	10.896	30	95
人文地理概説B得点 (0点換算)	留年退学なし	355	66.43	22.030	0	95
	留年退学あり	137	37.50	34.664	0	95
	合計	492	58.37	29.176	0	95
人文地理概説B出席率	留年退学なし	355	89.04	18.223	.00	100.00
	留年退学あり	137	63.12	34.416	.00	100.00
	合計	492	81.82	26.511	.00	100.00

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
人文地理概説A得点	グループ間	2514.503	1	2514.503	9.596	.002
	グループ内	123943.447	473	262.037		
	合計	126457.949	474			
人文地理概説A得点 (0点換算)	グループ間	60266.814	1	60266.814	85.370	.000
	グループ内	398862.332	565	705.951		
	合計	459129.146	566			
人文地理概説A出席率	グループ間	16718.967	1	16718.967	53.209	.000
	グループ内	177530.192	565	314.213		
	合計	194249.159	566			
人文地理概説B得点	グループ間	1971.671	1	1971.671	17.280	.000
	グループ内	45754.920	401	114.102		
	合計	47726.591	402			
人文地理概説B得点 (0点換算)	グループ間	82759.880	1	82759.880	120.975	.000
	グループ内	335211.307	490	684.105		
	合計	417971.187	491			
人文地理概説B出席率	グループ間	66454.358	1	66454.358	116.862	.000
	グループ内	278642.088	490	568.657		
	合計	345096.446	491			

表 18 留年・退学を因子とした 2 年成績総平均、  
4 年成績総平均についての分散分析結果

		記述統計				
		度数	平均	標準偏差	最小	最大
2 年成績総平均	留年退学なし	301	76.740	4.4577	67.8	93.0
	留年退学あり	78	75.465	3.9882	66.3	84.2
	合計	379	76.478	4.3905	66.3	93.0
4 年成績総平均	留年退学なし	250	77.715	4.2939	69.0	89.8
	留年退学あり	39	75.079	4.1288	67.0	86.3
	合計	289	77.360	4.3594	67.0	89.8

		分散分析				
		平方和	df	平均平方	F	有意確率
2 年成績総平均	グループ間	100.621	1	100.621	5.279	.022
	グループ内	7185.938	377	19.061		
	合計	7286.559	378			
4 年成績総平均	グループ間	234.371	1	234.371	12.840	.000
	グループ内	5238.806	287	18.254		
	合計	5473.176	288			

その結果単位不足で留年せざるを得なくなり、ついには退学へとつながるのか、あるいは、もともと入学当初から勉学へのモチベーションが低い留年・退学者予備軍といえるような学生だから、出席状況も芳しくなく、結果として成績が悪いのか、今回のような単純なグループ間の比較だけでは説明するには不十分である。

## 6. おわりに

以上の分析結果から、これまでよくわからなかった入試成績と入学後の成績に関して、いくつか興味ある結果が明らかになった。

まず、従来の研究でも指摘されていたように、推薦等入試と AO 入試による入学者は、出席率が高い傾向がある。ただし、今回の事例では推薦等入試グループの成績が高めなのに対し、AO 入試グループにはそのような傾向は見られなかった。

一部で懸念されていた、第二志望合格の制度が不本意入学につながっているのではないかという仮説は、第一志望の合格者と第二志望による合格者との間に、学業成績および留年・退学について有意な差は認められなかったことから、棄却された。むしろ不本意入学と何らかの関係があるかもしれないのは、意外にも学籍番号であった。むしろ学籍番号それ自体は学生の学力レベルとは関係がないが、後ろの番号の学生には学業へのモチベーションが低い場合があり、結果として欠席しやすく、留年や退学をしやすい学生の割合が多い傾向が見られる。

意外な事実として、地理・環境専攻といえども、入試時の地理の得点（成績）は入学後の学生の成績にほとんど関係せず、むしろ国語や英語の得点のほうが、



大学での成績との関連が強いことが示された。この関係が本当に正しいとすれば、入学者の選抜は国語と英語の2科目で事足りるということになってしまう。この点についてはもう少し細やかな検証が必要であろう。

また、近年 GPA の導入を巡って賛否があるが、たとえば「人文地理概説A・B」の場合もそうであったように、成績を代表する値として「不可」や「欠席」を評価計算に加えない現行の成績総平均より、いわゆる GPA を代表値として用いた方が、より多くの変数を説明できるようである。

もちろん、本研究はたまたま個人的に入手することができた限られたデータを元に、初歩的な統計分析を行ったものであるが、この結果を上手に活用することができれば、今後の入試制度改革の際の指標の一つとしても役立てることができるのではないかと考えたい。

## 参考文献

- 赤木充宏・日比野至・肥田朋子・平野孝行 (2011):名古屋学院大学人間健康学部リハビリテーション学科における学業成績の調査－入試区分の違いによる検討－. 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 47:272-81.
- 池田文人 (2009):入試区分による入学後の学業成績の優劣の検証. 大学入試研究ジャーナル 19:95-99.
- 伊藤隆造・須田勝・野口栄太郎・三宅輝久 (2003):筑波技術短期大学視覚部入学選抜方法研究会報告－入学試験成績と入学後の学習成績との関係調査－. 筑波技術短期大学テクノレポート 10-2:109-126.
- 大久保貢 (2007):入学選抜方法別による学業成績の追跡調査 (平成 18 年度). 福井大学アドミッションセンター年報 3:37-43.
- 岡田龍樹 (2003):入学者の学業成績からみた大学入試制度の分析－学業成績基準 (GPA) にもとづく入試制度評価の試み－, 天理大学生涯教育研究 (7), 21-32.
- 加藤敬子 (2011):お茶の水女子大学 AO 入試の現状. 高等教育と学生支援 1:37-48.
- 神林博史 (2010):入試方法と学業成績－東北学院大学 2009 年度卒業生データの分析－. 東北学院大学教育研究所報告集 10:33-41.
- 永峯卓哉・山崎不二子・古川秀敏・高比良祥子・綿巻轍 (2007):看護学科入学生の入試成績と学内成績の関係. 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要 8:29-39.
- 西丸良一 (2013):入学選抜方法と学業成績・能力向上. 『第 4 回社会学部卒業時調査調査報告書』同志社大学社会学部 G P 評価委員会 ,29-41.